

なる方だつて、人のうわ言をお讀みになるのもあんまり嬉しくはなさうでございませうからね。
折角のおたづねではございませうがこの通りボヤケた、ねつから面白くないお答へで、ほんとうにお氣の毒

上京前と上京後

水野 仙子

私の處女時代なんてことを回想しなければならぬ程私はまだ古女房でもない積りでしたのに、それでももう結婚して三年になります。この九月で九三年になる譯なのです。殊更にかう月日を繰つてみると探つた



水野 仙子

いやな氣がいたしますね、それだけ私はまだ家庭といふものに昵んで居ないのでせう。とんとかう自分達の日常生活を、家庭といふよりも單に男と女の共同生活のやうな風に

でございませう。
遠いところをわざ／＼お出で下さりましたのは、合の合のないことではございませうが、前に申上北通りでございませうから何卒悪しからず——まづはお断りまで——

考へて居ますからね、だから傍から普通の家庭取扱ひにされるのを最も怖れて居ます。それだけ自由を縛られるやうな氣がいたしませうもの。

こんな風で私は處女時代と今とあんまり違はない積りで自分は居ります。奥さんになると丸つきり體つきなどがそれは驚くほど變つてしまふ人がよくあります。それが當り前かも知れませんが——私にはそれも著しくないやうに思はれます。も

とから年よりも若く見られるせいか此間なども出入りの魚屋が「川浪さんの奥さんには旦那様がおあんなさるんですか？」と近所の奥さんに聞いたとかで大笑ひしました。
それでも昔の——つまり處女時代の寫眞などを出して見るとつく／＼今の姿や顔が厭になつてしまひますどつか洗練されて来た代りには、生のまゝつていふやうなところはなくなつてますもの、その時分なんだか大人びて撮れたと思つて厭がつたものでも、今になつて見ると、田舎娘

が如何にもなんにも知らなうな罪のない顔をして、その寫眞の前にお蜜柑でも供へたくなりました。自分つていふよりも自分の妹でも見るやうな感じがします。

處女時代といつても、一年毎に思想なり肉體なりが變つて行くことですから、細かに回想して行つたらいろ／＼面白い發見もあるでせうけれど、私はまだ處女時代に對してさう深い感慨も持ちません。子供でも持ちましたらその頃のことが遠い世界に見えて、際立つた感想を抱くことが出来るかも知れませんが。

私の處女時代は二期に別けることが出来ると思ひます。上京前と上京後とそこに一つの線が引かれます。私は二十二の年に出京しました。それまではほんの田舎娘で——尤も今だつて随分田舎者ですが——小學校を卒業すると普通の田舎の娘なみに前掛けをしめて黒い襟のかゝつた半纏を着てお針に通つて居ました。十四か五の時に、弦齋の「小猫」つていふ小説を讀んでから、非常に小説が好きになつてしまひ、それがどう

とう今のやうなことになつてしまつたのですが、十八十九時分まではそれでも自分は店屋のおかみさんにならなければならぬものと思ひ込んで居ました。といふのは、商ひをして居る姉夫婦には一人息子供があらませんでしたから、自然私が婿養子でもしなければならなかつたので

す。
それが一年／＼慰みの筆がほんものになつて来て、どうかして小説家になりたいなど、潜望望望を抱くやうになりました、今度はそれが嵩じて東京に出たくなる。家では初めどうしても許して呉れなかつたのでとう／＼家出を覺悟しました。それが二十一の時だつたらうと思ひます着替への着物などを一枚二枚と友達のところへ運んでたのを、とう／＼母に見つかつて倉の二階に招かれ、散々口説いて泣かされました。それで遂々未遂で終わりましたが、其時分は怖しく積極的な氣分になつて居たやうに思ひます。あの時分の意氣がいつまでも續かうものなら、どんな

ことだつて出来る譯なんですけどもね。しかしそんな風に家を逃れ出るといふやうなことは、私にしては藝術といふ目的があつたからなのだけれど、單にそればかりのものではなく、女が年頃になつて来ると、親の家といふものがどつかかう窮乏なものになつて来るのでないかと思はれます。一人娘とか總領にでも生れたなら格別、嫂とか義兄とかいふやうなものが出来て来ると、もの心づいたものにはともすると感情を複雑にしたがる傾きが生じて來ます。日本

の家族制度のやうに、總領が財産の全部とそれに附隨した權利を受ついで、弟妹はその保護を受けるといふやうになつて居ると、女などには

ならちにもどこか哀愁を含んで居て

に男と女の共同生活のやうな風に

のでも、今になつて見ると、田舎娘

でもしなければならなかつたので

ふやうになつて居ると、女などには

殊に窮屈で仕様がありません。相當な金をかけて嫁入り仕度を整へて貰ふといふことも遠慮を持たなければなりません。それやこれやで、丁度食客——それにしては随分我儘な贅澤な食客だけれど——でも、もあるやうな感じを抱きます。それが舊來の日本の女のやうに、すべてが受動的に動く女ですと、親や兄弟の見立て、計らつて呉れるまゝにお嫁にも行くでせうけれど、少しでも自覺した女それでもなくとも周囲の友達がその一身上に就いてかまつて呉れなかつた場合に居る女などには、どうかして自分の家——それは安心とか落着きとかいふやうな意味を多分に合んで居ます——を見付けたいと望みもし多少の努力も試みます。

その時分の煩悶といふやうなもの、それが思ふやうにならなかつた時の精神状態ではないのでせうか。無論自分の家といふものが、何處にあるか如何いふものであるか、解つて居たなら、それに行く道を阻まれない以上煩悶もないのでせうけれど、どんなものでも目的のある人はこんな時に幸ひだと思ひます。目的が即ち家にならなかつたもの。

つて居ました。十一月の末から永代美知代さんと初めて代々木の奥に小さな家を持つたので、その時の開放されたやうな嬉しい氣分を今になつても忘れることが出来ません。その前後頃の私は、獨斷家で、精力家で體も丸々と肥つてましたし、丁度脇道を知らない猪のやうでしたと今になつて可笑しく思ひます。

東京に出てからの處女時代も二期に分れます。代々木の家を解散してからの半年ばかりは、あつち一月此方に二月といふ風に、空らない生活をして居ましたが、そのうち一寸した職業が出来たので、その都合から下谷の西前に素人下宿をしました。その邊から面白い、さうして苦しい生活が初るので、男性的な私にもいくらか女らしい潤ひの出で来たのも其頃でした。藝術上の自分の力を疑つて情氣たり、焦慮つたり、思ふやうにならなないので自棄氣味になつたり、理性の勝つた私にもだんだん感情的なところが出て來ました。今ではこんなには居りませんとして居ますが、結婚つていふことにも小つびどく苛められました。全く處女にとつて結婚といふことは迷宮だと思ひます。考へても考へ切れません。

私はどうも評しを受けて出京しました。その時の私には藝術が自分の家でもあれば宗教でもありました。一口にいへばその爲めには戀も捨てました。四十二年の五月から十一月まで、田山先生の玄關に御厄にな

氣になつてからは、非常に心持が楽になりました。しかしそこまで心を運ぶのは大英斷が必要なのでした。これで私の處女時代の筋書は終りました。今になつて見ますと、あの時分結婚や結婚後に就いて考へたり想像してたことが、まるで見當違ひなことばかりで可笑しいやうなんです、苦勞つていふ苦勞も、人妻になつてからでなければほんとに味は、れないやうな氣がします。どんなに苦勞をして居た積りで、今から見ればどつか暢氣な間の抜けたところがありましたものね。あの時分は、處女が體を守るといふことは本能的だと私は思ひます。そして處女であるといふことが若い女に取つてのたゞ一つの身上ではないのでせうか、それがだん／＼年を取つて來ると、好奇心が非常な勢ひをもつて湧いてくるし、かた／＼處女であるといふことが絶対の矜りにはならなくなつてまゐります。それは周囲が、殊に男達が、さういふ年の多い處女に對して、いろ／＼な嘲りや揶揄を浴びせるからで、尤も紫の色の粗めた袴をはいて、いやに顔色のわるい分別顔の女なぞに出會ふと、女でも私は思はずでつとして、だけはなりたくないとよくさう思ひました。同性だけにその思ひが殊に痛いやうで厭でなりませんでした。

處女時代は女にとつて人世の春のやうなものではないでせうか。華かなうちにもどこか哀愁を含んで居てそれも秋のやうな冷たい感じのするものではなく、どこやらふつくらとして居ります。その春が逝くといふことが、どんなに／＼惜しまれたでせう！その感じだけは、日記にでも依らなければ忘れ氣味になつて居るその時分の心持ちに、際だつて残つて居ります。

青鞥以外には 平塚明子 度々御足勞をかけてすみません。折角ではございますが、とても御望には應じかねますので、さしからず御許しを願ひます。決してサンデーにはかり就華しないといふのはありません。青鞥以外のものには、當分あまり書きたくないのでせうか。

大變我儘な様で 保持 白雨 昨日は御足勞下さいました。丁度不在で失禮いたしました。小林さんから委しいこと承知いたしました。平塚さんにも、伊藤さんにも、御意は御傳へいたしておきました。けれども「書い／＼やうなことはない」などと申し居られましたから、御送りなされるか何うか分りません。私も大變我が儘な様ですみませんが、今考へをまとめる暇がありませんから、あしからずおゆるし願ひたいのでございます。右お返事のみ

感胃を引いて 尾竹紅吉 先達様しつれい。そのとき御約束いたしました原稿のこと、あれからさういふ感胃を引きまして、まだよくありませんので、とてもかけさうも御座りません。實に申議が御座りませぬが、あしからず御赦し下さいませ

感胃を引いて 尾竹紅吉

